

冠省 月日のたつものは早いもので、今年も残すところ後一ヶ月となりました。

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員諸兄には、越年準備に余念無き毎日をお過ごしのことと拝察する次第です。

さて先月は自衛隊記念日の為に関連行事は数多く、11月23日は川南護国神社で空挺慰霊祭が、習志野より児玉空挺団長以下多数の空挺隊員にご臨席を賜り、厳かに催行されました。

国旗掲揚や喇叭吹奏など都城43連隊の支援の下、川南遺族会を始め各県から空挺同志会員等の参加も大勢で、多分宮崎県では最大級の慰霊祭ではないかと存じます。

同25日は肌寒い中、串間市の空自高畑山分屯基地63周年記念式典があり、松下新平、宇都隆参議院議員などと親しく懇談させて頂きましたが、標高約500mの高畑山頂に約150名の隊員が起居すると伺い、礼文島や与那国島等の日本辺境の地に点在する各レーダーサイトの厳しい環境に勤務する隊員にも思いを致したところです。

また26日は都城駐屯地開設66周年及び同43連隊創隊55周年が雨天決行され、流石陸上自衛隊らしく記念式典から模擬戦まで全ての行事が篠突く雨の中、滞りなく挙行されました。

祝賀会には初代連隊長堀江閣下等のご臨席を賜り華を添えて頂きましたが、陸士50期、陸大57期で御年102歳の堀江閣下が紹介される度に、毎回会場から嘆息が漏れ伝わります。

毛髪はあくまで黒々として、杖はお使いですが背筋はぴんと伸びて直立し、頭脳明晰、言語明瞭とくれば、改めて閣下の自己管理と戦前教育の素晴らしさを再考せずにはおられません。

そして27日は日本会議設立20周年記念式典が東京プリンスホテルで全国より2000人を超える同志の参加者を得て、誠に盛大に開催されました。

約50名の衆参国會議員も列席して、20年間の歴史や直近の経過報告、そしてご来賓各位によるご提言などを賜り、「憲法改正」の機運を大いに盛り上げたところです。

尚、今月も小川先生のメルマガを一部抜粋して以下に掲載しますので、何卒ご一読下さい。

## ・トランプのアジア歴訪は「政治的威力偵察」

物の本には次のように定義されています。-----

「隠密偵察とは敵に察知されることなく行う偵察行動であり、威力偵察とは部隊を展開して小規模な攻撃を行うことによって敵情を知る偵察行動である」

隠密偵察というのは、普通に「偵察」と呼ばれている情報収集と考えればよいでしょう。

その「威力偵察」ですが、米国と北朝鮮の間の駆け引きについても行われていることはご存じでしょうか。

今年になって激しさを増してきた米朝のチキンゲームですが、9月29日に発表されたトランプ大統領のアジア歴訪(11月5～14日)が終わるまでを「猶予期間」と位置づけ、北朝鮮に態度を決めるよう求めた面があります。

話し合いの方向に舵を切るのならよいが、そうでなければ軍事力の行使もやむを得ないとする、北朝鮮から見れば、米国による「最後通牒」に近いものでもありました。

はたして、北朝鮮は「沈黙」しました。

あれほど強硬にミサイル発射を繰り返し、9月3日には水爆実験まで強行したというのに、9月15日の中距離弾道ミサイル「火星12」の北海道襟裳岬越えの発射を最後に、ぱったりと動きが見られなくなったのです。

もちろん、それでも北朝鮮の「口撃」は止むことなく続きます。9月21日には、北朝鮮建国以来2回目、実に1950年6月26日以来という「朝鮮労働党委員長声明」なるものが発せられ、金正恩党委員長は「史上最高の超強硬対応措置の断行を慎重に考慮する」と言い放ちます。

この「超強硬対応措置」について、李容浩(リ・ヨンホ)外相は記者団に対し、「恐らく歴代最大級の水爆の試験を太平洋上で行う事になるのではないかと、おどろおどろしく威嚇して見せます。

しかし、9月23日にB-1B戦略爆撃機が今世紀に入って最も朝鮮半島に近いルートを飛行したのに対して、北朝鮮側からはスクランブルの戦闘機の発進がなかったばかりか、防空レーダーさえ作動しなかったという、信じがたいほどの「無防備」ぶりがさらけ出されたのです。

B-1B戦略爆撃機の接近飛行に狼狽したのでしょうか、北朝鮮外務省の崔善姫(チェ・ソンヒ)北米局長が慌ただしくロシア側と協議し、核不拡散会議出席を名目に米国側のウェンディ・ルー・シャーマン元国務次官と接触するなど、なんとしても米国の軍事攻撃を避けようとするかの姿勢が目立つようになっていきます。

そういう展開の中で行われたトランプ大統領のアジア歴訪です。日本の訳知り顔のコメンテーターのように「首脳会談と言っても、通訳が間に入った30分とか40分で何が話せるのか」などと軽視してはなりません。具体的な話を首脳会談ですと考える方が間違いで、それは前もって事務方が行っているのが普通なのです。

トランプ大統領が日本、韓国、中国を歴訪し、ベトナムでAPEC(アジア太平洋経済協力会議)首脳会議、フィリピンでASEAN(東南アジア諸国連合)首脳会議に出席して、各国首脳から歓迎

される姿を「これでもか」「これでもか」と北朝鮮に見せつけ、その光景を圧力として金正恩委員長に核開発の放棄や凍結などについて決断を迫ったところに、アジア歴訪の最大の意味があったことを見逃してはならないのです。

9月23日のB-1B戦略爆撃機の北朝鮮への接近飛行は、北朝鮮の軍事的な出方を探るための「威力偵察」そのものだったわけですが、トランプ大統領のアジア歴訪は、いわば「政治的威力偵察」の性格を備えていたと考えてよいのです。

これに対しても北朝鮮は「沈黙」を続けてきましたが、11月13日号の編集後記「ちょっと気になる北朝鮮ニュース」に書いたように、明らかに戦争モードとは逆の方向にハンドルを切っています。その北朝鮮がどのような形で米国との対話や交渉に臨むのか注目したいと思います。以上

そんな中2ヶ月以上鳴りを潜めていた北朝鮮が、先月29日未明にICBM級のミサイルを青森県沖日本の排他的経済水域へ、4000kmの高度から打ち込んだとのニュースが飛び込みました。

またそれに呼応するかの如くトランプ大統領は、横田空軍基地に所在する国連軍後方司令部の8カ国に緊急会議の開催を要請したとの報道も仄聞したところではあります。

日本海に米空母打撃群3部隊が遊弋することも前代未聞なら、佐世保米海軍のホーバークラブト上陸用舟艇LCACが夜間訓練をしたとか、沖縄嘉手納基地のF35ステルス戦闘機の最近の爆音があまりに酷すぎると、周辺自治体の長からクレームがついたとか、こんなニュースを丹念に拾い読みしていくと、辿り着く先は何だか焦臭い話になりそうな気がします。

そうならぬことを願うばかりですが、北朝鮮に代償のない対話や核放棄を求めたところで現体制がそう簡単に方向転換等するはずもなく、時間の空費は相手に利するばかりです。

いま日本国民に出来ることは最悪の事態を想定して最善手を打つことであり、その為に先ずは憲法改正して国防議論を恐れず「祖国は自らの手で守り抜く」との決意の醸成かと考えます。

支部会員の皆様もミサイル等が身近に着弾しても狼狽えず、身体の保護と非常食等の準備を怠りなく、慌たしい師走を何卒無事にお過ごし下さい。(笑)

ところで来年2月9日18時よりスカイタワーホテルにて支部総会を開催致しますので、来年の予定表にご記入の上、全会員の参加をお待ち申し上げます。 不一

平成29年12月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦